

令和5年度 福井特別支援学校 学校関係者評価書

- (問) ・学校評価書の成果と課題への質問やご意見。
・成果と課題を踏まえた今後の改善策・向上策への質問やご意見。
・意見交換、全体を通したご助言。

(意見を聞いた方)

平谷こども発達クリニック円山事業所はぐぐみ 所長 高野 幸嗣 氏
福井市湊公民館館長 千秋 英幸 氏
福井県立福井特別支援学校PTA会長、福井県立福井特別支援学校後援会会長

○生徒支援

- ・学校は、学校安全教育に大変力を注いでおり、今年度その成果が認められ福井県教育委員会表彰を受けた。
- ・能登半島地震クラスの大地震の際にはご近所の共助は難しいと感じた。障がいがある子どもの保護者は、子どもと離れて被災するとは想像しにくいところもあるのではないかと。災害時要援護者登録の制度がある。

○進路支援

- ・子どもの実態の多様化や個別化により、進路支援に関して個々のニーズに応じる難しさがあつたという課題について、保護者と学校とのニーズのズレや溝をなくすために保護者との十分な話し合いが大事である。
- ・親なき後のことを考えると、子どものことを知る人や支え、つながりを増やしたい。地域との交流は大事である。
- ・個別のニーズに応じた交流学习と、学校が地域社会と接点をもつことの両面が大事である。
- ・昨今、自治会のあり方が問われ、地域とのつながりを感じにくくなっている。学校と公民館との地域交流はコロナ禍であっても工夫し継続してきた。学校からも活動内容についてどんどん提案してもらいたい。
- ・高等部から子どもが進学した保護者は、もっている情報が足りないと感じる。また、子どもが豊かな地域生活を送るために、いろいろな仕組みを利用すればよかったと感じる。保護者の参加が少なかったようだが、成年後見制度の学習会等、卒業生の保護者も進路学習会に気軽に参加できるようにするとよい。

○全体（総括）

昭和54年の養護学校義務制実施の際、交流教育の実質的な取組が始まった。その後、交流及び共同学習として取り組むことが法的に明確となると、学校間交流やより身近な地域とつながる居住地校交流が進んだ。一方で、子どもが大きくなると、居住地との関係性が薄れる現状があり、昨今地域の力自体も弱くなっていることから、学校在学中に地域とのつながりをいろいろな形で進めていくこととともに、社会全体でそれを支える仕組みや体制を構築することも求められる。

(学校関係者評価を踏まえた今後について)

能登半島地震がひとつの契機となり、災害への備えや地域とのつながりについて熱心な意見交換が行われ、特に生徒支援や進路支援に関する今後の示唆をいただいた。来年度も引き続き、日頃の学習や地域資源を活用した学習をさらに工夫したり多く設定したりして、子どもたちが地域とのつながりを増やし、地域生活を広げていけるように、環境整備を行いたい。特に日頃の学習においては、クラスや学部を超えて子ども同士が知り合い学び合う活動を通して、身近な人との関係性をつくろうとする主体性を培い、地域との豊かな関係性を築く意欲を育てていきたい。そして、保護者の方への発信を工夫しながら、保護者の方々とともに、子どもたちが暮らす将来の地域生活がより豊かになるように考えていきたい。